

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月23日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21792250

研究課題名（和文） 乳幼児をもつ父親の育児行動の促進に関する研究

研究課題名（英文） A study conducted on promotion of father's parenting behavior

## 研究代表者

山口 咲奈枝 (YAMAGUCHI SANAE)

山形大学・医学部・講師

研究者番号：20431637

研究成果の概要（和文）：父親は、話しかける、抱っこをする、遊び相手になるなど、直接子どもとかかわる行動を多くとっていた。また、父親が情緒的に支援するほど母親の育児負担感は軽減していた。母親が父親に求める情緒的支援には、話を聞いてほしい、相談に乗ってほしい、会話をしてほしい、感謝やねぎらいの声をかけてほしいという内容が含まれた。父親の育児行動を促進するためには、直接子どもと関わる行動と母親が求める支援を組み合わせた育児支援プログラムを開発することが今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：Fathers have taken many direct parenting, such as carrying out a hug and playing. In addition, I found a statistically significant correlation between the emotional support provided by the father and the parenting strain of the mother. Mothers need “hear her talk”, “give advice”, “conversation” and “gratitude and sympathy” for fathers as the emotional support. To promote the father's parenting behavior, it is necessary to develop parenting support programs regarding the direct parenting and support needed by mothers.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：父親・育児

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 父親が育児行動をする意義

母親を対象とした研究の結果から、父親が情緒的支援行動をしているほど母親の育児不安は軽減することが明らかとなっており、父親の育児行動は母親への育児支援として

も有用である。また、父親が育児行動を行うことは父親としての自覚を促すことにつながるため、父親としての発達にも重要な意味をもっている。このような背景から、次第に父親の育児行動に関する研究が注目されるようになってきた。

## (2) 父親の育児行動を促進する具体的支援策の必要性

厚生労働省は2005年に次世代育成支援対策推進法を施行し、2007年には、官民トップ会議において「仕事と生活の調和推進のための行動指針」を策定し、男性に対して、仕事と家庭生活の両立支援を進める観点から、育児参加の支援・促進を提言している。

具体的な目標値として2017年には男性の育児休業率を10%に、育児・家事時間を150分/日にするなど掲げている。しかし、2007年の男性の育児休業取得率は0.5%、育児・家事時間は60分/日と目標値との乖離がみられる。企業や政府については、目標を実現するための具体的な取り組みが示されているが、個人については、具体的な支援は打ち出されておらず、育児参加をするか否かは、個人の認識にゆだねられている状況である。したがって、現状を打開するためには、父親が育児行動を促進できるような、実際の育児に適応した具体的な支援が必要である。

## (3) 父親の育児行動を促進するための課題

父親の育児行動に関する研究は、母親の認識を視点とした研究が多く、父親が何をきっかけに育児行動を起こすのか、あるいは、育児行動を促進する要因は何かといった、父親の育児行動の背景要因を解明する研究はない。父親の育児行動の起因や促進要因を明らかにすることは極めて重要な課題である。

## 2. 研究の目的

本研究は、父親の育児行動を促進するための実際の育児に適応した、現実的な支援方法を提示することを目的とする。全体構想は、父親の育児行動の起因や促進する要因を解明して、父親の育児行動を促進させる育児支援方法を検討することである。

父親の育児行動は、子どもの世話や相手、家事、妻への情緒的支援行動など、父親が行っている育児に関わる全ての行動と定義した。

## 3. 研究の方法

(1) 全国の保育所から無作為抽出した保育所に通う子どもをもつ父親および母親を対象に、自己記入式質問紙調査を実施した。質問内容は基本的属性として、年齢、家族形態、子どもの人数、就業の有無を尋ねた。また、父親へは育児支援行動尺度(中山:2003)、母親へは育児負担感指標(中嶋:1999)を尋ね、父親の育児行動の実態を明らかにし、父親の育児行動と母親の育児負担感との関連を検討した。

(2) 全国の認可保育施設に通う子どもをもつ母親を対象に、父親に望むサポートについて「父親(パートナー)にどのようなサポートを望みますか」という質問の自由記載を求めた。この自由記載をテキストデータとしてテキストマイニング分析を行い、母親が父親に望む育児行動について検討した。

(3) 倫理的配慮として、対象者に文書で研究趣旨、研究協力の任意性、匿名性の保持等を説明した。また、本研究は、研究者が所属する大学の倫理審査会の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

(1) 父親の育児行動の実態と父親の育児行動と母親の育児負担感との関連

質問紙は43施設4579組に配布し、父親1309名(回収率28.6%)、母親1459名(回収率31.9%)から回答が得られた。父親の平均年齢は $36.0 \pm 5.6$ 歳(Mean $\pm$ SD)、母親の平均年齢は $34.4 \pm 4.7$ 歳であった。子どもの人数は一人が445名(30.9%)、二人以上が999名(69.1%)であり、就業している母親は1274名(88.1%)であった。父親の育児行動で最も頻度が高かったのは、話しかける、抱っこをする、遊び相手になるなど、直接子どもとかわる行動であり、「よくする」と回答した割合が6割以上を占めた(図1)。

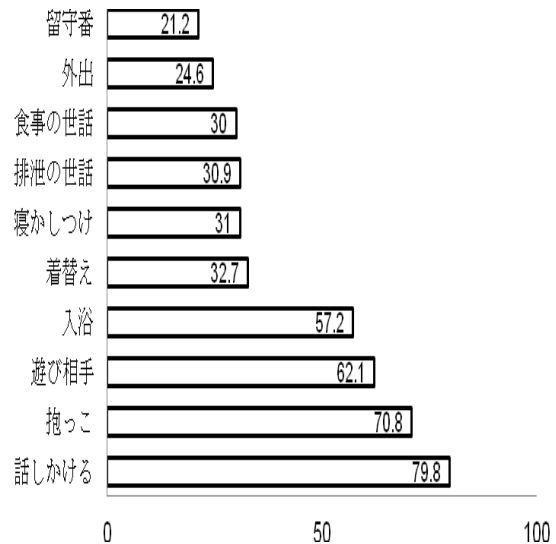


図1. 子どもの世話

父親の育児行動は父親の年齢と弱い負の相関があった( $r = -.09, p < .01$ )。また、母親の就業の有無、家族形態によって家事行動の頻度に差が認められ( $p < .05$ )、子どもの

人数によって直接育児行動、情緒的支援行動に差が認められた ( $p < .05$ )。父親の情緒的支援行動と母親の育児負担感には弱い負の相関が認められた ( $r = -.19, p < .01$ )。

本研究の結果から、父親の育児行動は年齢や母親の就業、子どもの人数などの背景要因によって頻度が異なることが明らかとなった。このことから、生活背景を把握した上で個別的な支援をすることが、父親の育児行動を促進する支援につながると考える。

## (2) 母親が父親に望む育児行動

父親に望むサポートの自由記載について、全テキストデータから頻出語を検索した後、各頻出語について出現の有無をダミー変数に変換した。この際、頻出語の定義は全テキスト中における出現頻度 20 以上の語とした。その結果抽出された頻出語は 21 語であった (表 1)。コード数は「家事」が 222 で最も多く、次に「育児」196、「私」115、「仕事」94、「自分」85、「時間」81 の順であった。頻出語ごとに就業の有無や家族形態、子どもの人数で出現率を比較した。その結果、就業している母親の方がしていない母親よりも「協力」という語の出現率が有意に高かった ( $p < .01$ )。また、核家族の方が複合家族よりも「精神的」という語の出現率が有意に高い ( $p < .01$ ) ことが明らかとなった。

表 1. 頻出語の出現率

頻出語	出現率
家事	222
育児・子育て	196
私	115
仕事	94
自分	85
時間	81
今のまま	70
遊ぶ	62
話し	60
夫	58
サポート	53
休日・休み	51
精神的	50
子ども	38
協力	36
家	32
相手	31
食事	29
一緒	29
病気	21

また、母親の育児負担感と関連のあった情緒的支援行動に焦点をあて、テキストマイニング分析を行った。その結果、「情緒的支援行動」から抽出されたコードは 120 であった。カテゴリーは「コミュニケーション」、「理解・関心」、「精神的なサポート」、「義父母との関わり」、「決定力」、「育児共同感」の 6 つが抽出された。母親が父親に求める情緒的支援の中でも「コミュニケーション」が 70 件と最も多く、話を聞いてほしい、相談に乗ってほしい、会話をしてほしい、感謝やねぎらいの声をかけてほしいという内容が含まれた。以上の結果から、母親は、父親からのサポートとして家事を望んでいることが明らかとなった。また、情緒的支援として、話を聞いたり、相談にのるといってコミュニケーションを望んでいることが明らかとなった。

本研究の結果から、父親の育児行動の実態として、直接子どもと関わる行動の頻度が多かったことから、父親の育児行動を促進するためには、妊娠期や出産後早期に、父親に対して育児技術を教育することが重要であると考えられる。また、母親が父親に望むサポートとして、父親が家事のサポートをすることや母親とコミュニケーションをとることが挙げられたことから、父親に対する具体的な育児支援の 1 つとして、家事のサポートやコミュニケーションを図ることの重要性を解説することで、母親の望むサポートの促進につながると考える。

父親に対する育児支援については、母子保健法で規定されている保健指導の対象者が妊婦だけでなくその配偶者が加えられた 1997 年以降に、父親を対象とした研究数が増加している。しかし、研究方法としては実態調査が多く、父親を対象とした保健指導の評価や、具体的な育児支援プログラムは検討されていない。他方、国外では、父親に対する育児支援についての介入研究が行われており、評価する項目を具体的に提示し、育児支援の効果を検証している。今後は、育児支援の意義を明確にするために、具体的な育児支援プログラムの開発や、育児支援の効果を評価する研究を推進することが重要であると考えられる。また、父親への育児支援の課題として、既存の枠を超えた新たなコンセプトの育児支援の場の構築や、具体的で父親のニーズに即した育児支援のサポート体制作りが検討されていかなければならないとされている。このことから、指導項目だけでなく、父親を対象にした育児支援体制についても検討していく必要があると考える。

父親の育児行動を促進するための今後の

課題として、直接子どもと関わる行動と母親が求める支援を組み合わせた育児支援プログラムを開発することが必要であると考え

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

- ① 山口咲奈枝:父親からのサポートに対する母親の認識と父親の育児行動との関連. 第34回山形県母性衛生学会, 山形市, 山形県立保健医療大学; 2011年10月29日
- ② 山口咲奈枝:未就学児をもつ母親の育児負担感に関連する要因の検討. 第37回日本看護研究学会学術集会, 横浜市, パシフィコ横浜; 2011年8月7日
- ③ Sanae Yamaguchi, Hinako Uno, Yukiko Sato, Miyuki Saito, Shiho Sato: A study conducted in Japan on parenting behaviors of fathers who have infants. 10th International Family Nursing Conference, Kyoto, Japan, June 25<sup>th</sup> 2011.
- ④ 山口咲奈枝:乳幼児をもつ父親の情緒的支援行動と母親の育児負担感との関連. 第30回日本看護科学学会学術集会, 札幌市, 札幌コンベンションセンター; 2010年12月2日
- ⑤ 山口咲奈枝:3歳児をもつ父親の育児支援行動と母親の育児負担感との関連. 第36回日本看護研究学会学術集会, 岡山市, 岡山コンベンションセンター; 2010年8月21日

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山口 咲奈枝 (YAMAGUCHI SANAE)

山形大学・医学部・講師

研究者番号: 20431637